



CLUB OFFICE
京都YMCA 三条本館
京都市中京区三条通柳馬場角
TEL 075-231-4388

THE Y'S MEN'S CLUB OF

Kyoto Prince

THE SERVICE CLUB OF THE YMCA

AFFILIATED WITH THE INTERNATIONAL ASSOCIATION OF Y'S MENS CLUBS
"TO ACKNOWLEDGE THE DUTY THAT ACCOMPANIES EVERY RIGHT"

2020

7

Bulletin
2020.7.1発行
第35巻第1号通巻415号

主題
国際会長 VALUES, EXTENSION and LEADERSHIP
アジア会長 変化をもたらそう 奮い立たせよう
西日本区理事 Let's do it now! 2022に向け誇りを持って All is well.
京都部部长 人生は一度きり 出会いから全てが始まる

聖句
何事も利己心や虚栄心からするのではなく、へりくだって、互いに相手を自分よりも優れた者と考え、めいめい自分のことだけでなく、他人のことにも注意を払いなさい。互いにこのことを心がけなさい。それはキリスト・イエスにもみられるものです。

フィリピの信徒への手紙第2章3～5節



「より強い絆で」

第35代会長 澤田 哲平

第35代会長を拝命いたしました澤田です。どうぞ皆さん、1年間よろしく願いいたします。

皆さんにとってもう耳にタコができるぐらい聞きまくられた「新型コロナウイルス」という言葉。もう口に出すのも鬱陶しく、避けたかった言葉ではありますが、やはり今期において、決して目を逸らすことができないワードかと思えます。様々な場面で、その影響を受けることは想像に容易く、新しいクラブ運営を求められる期になると考えています。

このような状況を受け、今期の会長主題は「より強い絆で」、そして副題は「仲間ってほんとうにいいものですね」とさせていただきます。小野会長の下「守るために変えてゆこう、少しずつ」を主題にメンバーが一致団結し、プリンスの伝統を守りつつ新たな例会を実践してきた期を受け継ぎ、予想だにできなかった事態に、全員で力を合わせ乗り越えてゆこうという思いを込め、この会長主題にさせていただきます。

ひとつだけ、皆さんに強くお願いしたいことがあります。ワイズメンズクラブは人と人とが交流し、親睦を深め、そして奉仕活動を通して自己研鑽をしていく。これがクラブの存在意義ですが、まずはメンバーの皆さん自身が健やかであることを最も大切にする、そんな1年にさせていただきようお願いいたします。

これから第二波、第三波の可能性は決して否定できず、しかし、それを後ろ向きに考えるのではなく、長くは続かないこの異常事態を「強い絆」で乗り越え、「仲間っていいものですね」と改めて感じる事ができる1年であるよう一致団結していきましょう。と、こんな話ばかりしてしまいましたが、先日の引き継ぎ例会、その後の親睦会兼野村ワイズの歓迎会はとても楽しかったですね。久々に皆で集まることができ、充実した時間を過ごすことができました。

今期はプリンスクラブ創立35周年の事業を具体化していく大切な一年となります。ベテランから新参メンバーまで、皆がアイデアを出し合い、しっかりとした準備をしていきましょう！そして充実のクラブライフを皆で楽しみましょう！1年間、どうぞよろしく願います。

会長主題

より強い絆で

仲間って本当にいいものですね

会長 澤田 哲平
副会長 三村 良行
飯尾 豊
書記 宇高 史昭
会計 岸 裕也
ネット会長 澤田真紀子

強調月間

Kick off・EMC-C

7月 例会案内

5日(日) サバエワーク
クラブ設立以来続いてきたサバエワークも今年で終了。最後のワークをみんなで成し遂げよう。

20日(水) 定時総会
3ヶ月振りのホテル例会。この一年の活動を充実したものにしよう。

例会出席

6月第一	14名
6月第二	13名
在籍者数	17名
メーキャップ	0名
出席率	100%

BFポイント

切手	0pt
現金	0円
累計	16,000円

ファンド

	0円
	0円
累計	391,535円

ニコニコ

6月第一例会	0円
6月第二例会	0円
累計	103,077円

6月第一例会

2020/6/3
岸 裕也

6月第一例会は、プリンスクラブ初のZoomでの開催となりました。3月第二例会以降、新型コロナウイルスのため例会開催は自粛、また6月末まで例会場であるグランドプリンスホテル京都が休館となりました。プリンスクラブでは例会や役員会等で顔をあわせることができない期間にも有志メンバーにて、4月17日の第一回、4月19日の第二回、4月26日の第三回と合計3回のZoomテストミーティング、その後5月7日の非公式WEB準備例会、5月27日の役員会をZoomで開催しました。回数を重ねるごとに参加できるメンバーが増え、そして、6月第一例会には、メンバー同士がソーシャルディスタンスを保ちつつ集まるところもありましたが、全員がZoom例会に参加できる条件が整えることができました。

ホテルでの食事のある例会とは違い開始時間は20時より、ドライバー委員長の岡西ワイズの司会でスタート。開会点鐘、ワイズソング斉唱、小野会長挨拶、役員会・委員会報告と、通常の例会の進行が行われました。またメンバースピーチでは各人3分程度で、自粛期間の生活、仕事に関する影響等についてのお話がありました。今回のコロナ渦により、人と会い、外へ行き、お店に行き、自由に出かけるという当たり前が一変するような状況となり、ストレスはあるものの、やはり健康が一番であるということを変更して感じることができました。またメンバーが顔をあわせてお話ができるホテルでの例会開催が一番ですが、それが難しい状況下でも、Zoomというツールを利用して、メンバーが集まれるプリンスクラブは良いものだと思います。また今後コロナの第二波がやってくるかもしれないという状況で、Zoomの利用やその他の方法でも、メンバー間でコミュニケーションがはかることができるように考えていきたいと思えます。



6月第二例会

引継例会

2020/6/20
森 伸二郎

どうなる事やらと思っていた今期の引継例会。京都YMCA102教室で、14人の出席の下、開催することが出来ました。窓とドアを開けて、人と人の間合いも開けて、マスク装着での開催です。当初は「オンラインで」の声もあったのですが、「それでは味気ないね。引継例会なのに」の声が挙がり、岡西ドライバー委員長の計らいで、YMCAの教室を借りることが出来ました。

小野会長最後の挨拶に続き、出席率200%表彰。今年は飯尾ワイズと岡西ワイズの2名だけ。例年だと5,6人は居るのに……。その後、会長から事業委員長、三役への感謝と記念品の贈呈。そして、三役から会長へのご苦労さんの贈り物と、いつもと同じ流れでの進行なのですが、ここまで30分足らず。

続いて澤田新会長の登場で引継式。新三役・新事業委員長の紹介に続き三役のバッチ交換。これも例年と同じなんだけど、いちいち壇上に上がる事も無かったので、そそくさと終了。そして澤田新会長の所信表明。主題は「より強い絆で」。コロナの蔓延、予想だにしなかった事態に、全員で力を合わせ乗り越えてゆこうという思いを込めての主題だと説明されました。

例年の様に一年の活動をスライドで振り返る事も無く、淡々と引継のセレモニーが進み、予定より大幅に、1時間ほど早く引継例会が、終わってしまいました。YMCAでは宴会が出来ないので、懇親会は、円山公園の「いふじ」で。時間が余ったので、みんなで歩いて向かいました。コロナの為に宴会には参加できない方もあるので、懇親会は有志でという事で行いました。



今期の初めには予想もしていなかった新型コロナウイルスの影響で、引継ぎ例会の開催も危ぶまれていましたが、無事に開催する事ができ、その後、メンバー13名参加の中で八坂神社の“いふじ”にて開催されました。

久しぶりのメンバーの会合という事もあり、いつも以上に楽しい声と元気な声が飛び交う中、コロナはどこ吹く風(笑)という感じの楽しい雰囲気の中で、新メンバーの野村ワイズの歓迎会も行われました。やはり、直接顔を合わせて、それぞれの近況を話し合える事は、ワイズメンズクラブに所属する大きな意味だと改めて実感致しました。野村ワイズ、メンバー全員ご入会を大変喜んでおります。これからも宜しくお願い致します。

懇親会では、私が小野会長と澤田次期会長とテーブルが一緒だったこともあり、二人の自粛中のゴルフ練習談義の盛り上がりの流れで、7月19日(日)にプリンスクラブ主催でゴルフコンペを実施する事も決定致しました。ゲストもたくさん参加頂き楽しい会になる事を期待して進めて行きたいと思っております。

クラブへの思い (毎月連載)

齋藤 謙治



今回与えられたテーマは、「クラブへの思い」ですが、現時点 思考の大部分を占めるのは、新型コロナウイルスの事です。私はコロナウイルスのパンデミックは、自然界からの人類に対するメッセージ(警鐘)だと思います。

歴史的にも、ペスト、コレラ、スペイン風邪等があり、ペストに付いては、6、14、19世紀の三回もパンデミックが起こり、特に1346年ヨーロッパでは黒死病と呼ばれ5000万人の死者が出て、社会構造改革(ルネッサンス)の引き金となった事は有名です。スペイン風邪も20世紀初頭患者数が世界人口の25~30%が罹患して、4000万人が死亡して居ります。一説によると第一次世界大戦もスペイン風邪の為に終戦が早まったとの説も有り、パンデミックは世界の経済や社会の枠組みを変える力を持っています。

今回の新型コロナウイルスも社会構造の暗部を白日の下にさらけ出して、種々の問題を提起しました。社会的弱者にしわ寄せが集中して悲

惨なニュースが日々報道され、気持ちが悪入り言いようがない怒りを感じています。中でもコロナウイルスで亡くなった人の扱い、完全密閉の遺体収納袋にいれ遺族にも会わせず、素早く火葬で処理しなければならない現実。人間の死の厳粛さは何処へ行ったのでしょうか。

規制が徐々に解除され、日常生活を取り戻すべく人々は努力されていますが、マスク着用や「三密」を避ける生活様式の変化はこの先、数年は続く様に思われます。世界的に「三密」の反動として、権力の分散、情報の拡散、難民・移民の逃散が加速され価値体系の再構築が起こるでしょう。結果としてワイズの活動形態も変化せざるを得ないでしょうが、社会的弱者に寄り添う気持ちと奉仕の心だけは忘れずに、何が出来るかを考え、行動出来るクラブでありたいと思っております。

6月度 役員会報告

報告事項

●京都市自治会より表彰を受ける。
小野会長が代表として貰いに行く。

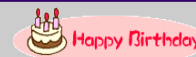
承認された事項

●事業委員会の年間活動報告書及び会計報告書を定時総会に提出する。

7月 スケジュール

- 5日(日) 8:45 サバエ開設ワーク
サバエ教育キャンプ場
- 15日(水) 19:00 第二例会 定時総会
グランドプリンスホテル
- 27日(月)~ スイカデリバリー開始
京三運輸と廣井事務所
- 29日(水) 19:30 役員会
廣井事務所

7月



2日 小野 敏明

編集後記

コロナの中、僕達にとって、どんな活動が出来るのでしょうか？大きく問われる時が来ていると思います。何をやらなければならないのか。何をやらしてはいけないのか。しっかり考えたいと思います。

1. サマーキャンプ・サマープログラム情報

夏休み中の子ども達のためのサマーキャンプとスイミング・体操のサマープログラムの日程等が決まりました。詳しくは、下記のQRコードを読み取ってご覧になります。



会員の方のお申込期間は以下の通りです。ぜひご参加ください。お申込み期間：(Web) 6月29日(月)～(電話) 検討中

お申込み先： 京都YMCAウエルネスセンター 下記のQRコードを読み取ってお申込みください。



2020/5/28 京都新聞 朝刊より

ブリテン委員長 岡西 博司

「ステイホーム」は自身と大切な人を守る行為だと言われるが、軟禁状態の長期化によって精神は蝕まれていく。家庭が危険な場である人にとってはなおさらだ。息を殺し、身を縮めながらの生活に、心身ともに追い詰められている。「社会的距離」を保つようにという要請も、不便だと愚痴を言いつつ済むならよいが、家族以外の他者と接することで命を支えられている人にとっては死活問題だ。

「オールジャパンで乗り切る」という掛け声を耳にするが、社会が緊急事態下にあるとしても、皆が同じ危機を生きているわけではない。感染拡大防止対策が必要不可欠であることに異論はない。しかし、社会全体を対象にした公衆衛生策とわずかな経済対策だけでは、コロナ禍以前からぎりぎりのところで生きていた人々たちを、関連死へと遺棄することになるのではないだろうか。経済的困窮に起因する自死だけでなく、社会的つながりを断ち切られたことによる緩慢な死へともある。

京都大人文学研究所准教授 直野 章子

新たな社会 他者の苦しみに想像力を



なおの・あきこ 1972年生まれ、兵庫県出身。専攻は社会学。米カリフォルニア大で博士号。九州大、広島市立大を経て今春から現職。主著に「原爆体験と戦後日本」「被ばくと補償」など。

ス、障害者や高齢者らにとっては、地域や民間の支援団体が命綱となってきた。必要な公的支援が乏しい中で支援者たちは奮闘してきたが、感染拡大後、多くの団体が活動を停止もしくは大幅に縮小せざるを得なくなっている。「命を守るための指針は、支援を必要とする人の最後の砦を奪ってしまうことにもなりかねないのだ。」

対面を避けつつも支援を継続するために、オンラインや電話相談が既に始まっている。だが、支援活動はリモートワークのようにはいかない。オンライン媒体を通しては、表情を読むことも視線を交わすこともできず、そこにある苦しみを感知するのが極めて難しい。苦しむ存在に気が付くには、場を共有することが求められるからだ。そもそも、助けが必要な人が機器にアクセスできるとは限らないし、きたとしても、自発的に支援を求めるのはハードルが高い。助けを求める余力さえ残っていない人には、声を掛けてもらうことが生と死の分かれ目となることもあるのだ。

窒息しそうな閉塞感と不安に、私たちの心はささくれ立っている。しかし、「社会的距離」を他者の苦しみに背を向ける自己防衛の壁にしてはならない。

子どもが公園で遊んでいる姿にいら立つて学校に苦情の電話をかける前に、公園がその子にとって唯一の逃げ場となっているかもしれないと想像力を少しだけ働かせてみてはどうだろうか。

家庭が安全な場ではない子にとって、家の外へのアクセスが閉ざされることは、安心できる場とSNSのサインを受け止めてくれる人を失うことを意味するかもしれないからだ。

「助けて」と声を上げることをすらできないかもしれない存在に目を凝らし、コロナ禍以前から誰がどんな苦しみや不安の中に置かれてきたのかを想像してみよう。

そして以前とは違う社会を創っていく。死の方へと追い詰められる人を一人でも減らすために。

新型コロナこう考える